

Environment and Health ISSN 1880-4055

環境と健康

Vol.24 No.1 SPRING 2011

特集 / 心身はひとつ - 心身医学、臨床心理学と東洋医学

Editorial/ 言語と心の教育 - 小児期の母親の役割
いのちの科学/ 寿命の意味

トピックス/ 危機にある地域医療に携わって

コラム/ 「なるほど」と「ほどほど」の「あらい」

サロン談義/ 変貌する世界(Ⅲ)

連載講座/ 不老長寿を考える(X)

漢字の散歩道(V) 数字は符号か、文字か
メタボの正体(I)



環境と健康

Environment and Health

Vol.24 No.1

SPRING 2011

特集 “こころと身はひとつ —心身医学、臨床心理学と東洋医学—”

心と身体の間には一つであって一つになれない関係がある。私の心、私の身体には、己にはよく分かっているようにみえて実はよく分からない面がある。突如として不死の病を宣告されただれでも鬱状態に陥るだろう。

「病気にかかっているのは私の身体だから私の心は関係ない」というわけにはいかないのだ。このような関係、分かっているようで分からない心と身体の関係について医学、心理学、哲学の様々な側面から考察した。この問題は、実は、今日においてもなお分からないことだらけなのだ。



言語と心の教育 —小児期の母親の役割

本庄 巖*

本号の特集では、「こころと身はひとつ」をテーマとして、心と身体との関係について、医学、心理学、哲学の様々な側面から考察されています。新しく誕生した生命には、五感を通して心が育まれていきます。ここでは聴覚を取り上げて、小児期における母親の音声言語が、その後の心の形成に果たす役割の大きさを述べたいと思います。

現在の学校では「頭の教育」が主体であり、「心の教育」の方は戦後長くタブーとされてきました。しかし昨今の小中学校では先生のコントロールがきかず、授業が困難なところもあるのを耳にします。そこで最近になってやっと道德の時間が認められたそうです。このような状況を変えるべく教師を対象にした「心の教育シンポジウム」が昨年末に開かれ、お誘いを受けてこれに参加して色んなことを知りました。その一つは荒れた教育現場で坐禅の時間を設けたところ、クラスがかなり落ち着いたという報告でした。また驚いたのは学童のアンケートで約半数がヒトは死んでも生き返ると答えたとのことで、児童の心がゲームなどの架空の世界に支配されていることが分かりました。この架空の世界は言葉ではなく、映像による視覚情報によって形成されています。

今回のシンポジウムの講師は各界のエキスパートで、私などは場違いの感じでしたが、難聴を治す人工内耳という医療の経験から、子供の脳が本来持っている大きな能力と年齢とともに子供の脳から失われてゆく可塑性（変形しうる性質）など日ごろから教育について考えていることを話し、さらに言語と脳に関する脳機能画像の視点から、先の坐禅で用いられた呼吸を数える数息観の意義について述べました。

さて人工内耳という新しい医療は、内耳に入れた電極を介して言葉の情報を脳に伝える画期的な医療で、生まれつき音が聞こえない小児でも手術で言葉が分かるようになり、通常の進学コースに進むことが出来ます。しかしどの程度言葉が分かるようになるかは、手術を受けた時の年齢が鍵を握ります。3、4歳までに手術を受けると結果は良いのですが、思春期を過ぎると言葉の理解は難しくなります。これは脳の可塑性という生物の掟による

*京都大学名誉教授（耳鼻咽喉科学）

ものです。子供の脳は粘土のように柔らかく、言葉の習得に関して言えば3、4歳のころが最も可塑性に富み、この時期以後になると脳は次第に固まってゆき、言葉を理解するのが難しくなるのです。

ちなみにヘレンケラー女史が聴覚と視覚とを失ったのは1歳9カ月ですので、彼女の脳内には言語のネットワークがかなり出来ていた筈であり、もしこの基盤がなければサリバン先生の献身的な教育も実を結ばなかったでしょう。脳の可塑性の年齢的な制限を示す例はアメリカでも報告されています。ある特殊な事情で耳からの言葉が全く入らない状況で成長したジニーという少女は13歳で救出されたのですが、遂に2、3歳児以上の言葉はしゃべれませんでした。しかし6歳半で救出されたイザベルは1年余りで全く普通の英語を話せるようになったそうです。脳の可塑性に年齢制限があることは歌舞伎や能など日本の古典芸能の世界でもよく知られていて、その子弟は幼児の時から厳しく芸を仕込まれます。

ヨーロッパでは多言語の人がよくみられますがこれも特別な才能ではなく、たとえば子供の時からスイスのような多言語の環境にいれば、ドイツ語、フランス語、イタリア語くらの言葉は自然にしゃべれるようになるのです。また昔はヨーロッパの上流社会ではフランス語が共通語で、そのため乳母や家庭教師にフランス人を雇ったそうですが、幼児期からこのような言語環境に置けば子供たちは自然にフランス語が話せるようになるのです。

興味深いことに、脳の中ではそれぞれの言語で働く場所が少しずつずれていて、たとえば私たち日本人の脳でも漢字とひらがなやカタカナなど、それぞれの文字によっても少しずつ違った場所を使って文字を理解していることが分かっています。戦後わが国では子供の負担を軽くするためか漢字の制限が行われ、今でも常用漢字の制限が続いています。しかし江戸時代の子供は寺子屋で四書五経などを大声でよむ素読でこれらを暗記していたのです。可塑性に富む子供の脳はスポンジのようにいくらでも知識を吸収する能力を持っているのではないのでしょうか。

脳の発達についてみますと、生まれたばかりの赤ちゃんの脳でも脳細胞の数は百億個と大人の脳と変わりませんが、脳の重さは生後半年で2倍になり、7~8歳になると大人の重さに近づきます。この急激な脳の重量の増加は脳細胞をつなぐ神経線維が増えたことによるもので、生後1年で神経線維はほぼ10倍と爆発的に増えるのです。そして例えばお母さんの顔とお母さんの声とを結ぶ神経線維はより強くなり、同様に火を見たときに

は熱いという温度覚と、ケーキを見たときには甘いという味覚と結びつくように、神経線維の結びつきは学習や経験で強められてゆきます。更に物事の善悪や弱い者いじめはしないなど、道徳的な判断も学習によって神経線維の結びつきが強化されてゆきます。「子供は親の見本」といわれるように、人としての基本は母親あるいは祖母など家族のお手本が大切です。子供は母親から“mother tongue”としての母国語を学ぶと同時に人としての倫理も学んでいるのです。この母親役の不在が現在の学級崩壊の危機を生んだ原因の一つではないでしょうか。

言葉と脳の関係を画像で調べた私たちの研究結果をお話しします。興味深いことに、しゃべっている時には言葉を理解する脳の場所（聴覚を司るウエルニッケ野）は活動を止めているのです。これは自分の言葉は聞かないようにしているのですが、もし自分の話の内容をいちいちチェックしているとスムーズにしゃべれなくなるからです。これは聞こえないふりをするいわゆる詐聴の検査として利用されていて、自分の話し声を少し遅らせて聞かせると、もし本当に聴こえているのであればうまく話せなくなってしまうのです。いっぽう他人の話しを聞いている時には聴覚を司るウエルニッケ野の活動は勿論ですが、言葉をしゃべる時に働くブローカ野も参加して言葉の理解を助けているのです。このように私たちの脳は目的に沿って巧みな対応をしていることが分かります。

更に聞く、話すなど普段私たちが行っている言語活動の際には、スポーツや体のバランスをとる時に必要な小脳も必ず働いています。このことは高次の脳機能とされる言語活動も実は身体運動の一種であることを示すものです。私たちは手足の運動と同じやりかたで、のどや舌や唇を動かして言葉を発しているのです。いっぽうこれを聞きとる場合も言葉を発する時とほぼ同じ所を使って理解をしているのです。その意味でも音声を使った肉声による言語（音声言語）はヒトのコミュニケーションの基本形といえます。現在子供たちは過剰な情報社会の中でゲームやメールなど視覚に頼る架空世界に支配されていますが、相手の顔の表情を見ながら話す音声言語を取り戻すことが必要でしょう。認知症のお年寄りでも童謡や小学唱歌はよく覚えていて、これを聞くと表情がなごみ、更に一緒に歌うこともできるそうです。これも脳に可塑性のある若い時期に憶えた身体運動がよみがえることを示しているのでしょう。

更に文字で書かれた文章を黙読している時の脳も、言葉をしゃべる時に使われるブローカ野が活動していて、脳内では文字による言語も声に変えられて処理されるようです。こ

のことからも文字言語が音声言語から派生したものであり、これは私たち大和民族が飛鳥時代に漢字が到来するまで、文字言語とは無縁な社会を営んできたことからわかります。

また先に述べた心で数を読む数息観では、呼吸を数えることに集中することで脳の働きはこのブローカ野に限定されて行き、脳の他の場所はほとんど沈黙するものと考えられます。こうして子供たちは日常とは違う静かな世界に入ることができるのでしょうか。しかしこのためには指導する教師にかなりの力量が要求されることとなります。

以上まとめてみますと、人工内耳の臨床経験から、心の教育という点では脳の可塑性に富む小児期の母親の役割は極めて大きなものがあると考えられます。以前は同居する祖母や近所の人たちがこれを助けていたのですが、今は核家族化でこの役割が母親だけになっていて、これが今日の事態を招いた原因の一つではないかと考えられます。また公立学校ではほとんど宗教教育は行われていませんが、今回の数息観による静坐は少なくとも落ち着いて先生の話聞くきっかけにはなると思われます。学校は知識伝授の場ではありますが、これまで避けられてきた「心の教育」にも目を向ける時期に来ているようです。さらにメールなど相手の顔の見えない文字言語ではなく、肉声を介した音声言語をもっと活用すべきではないでしょうか。学童の心の教育の面で私たち大人に何ができるかを探る今回の「心の教育シンポジウム」の意義は大きく、今後もこの会の役割に期待したいと思えます。



目次

特集 / こころと身はひとつ ー心身医学、臨床心理学と東洋医学ー

Editorial

言語と心の教育ー小児期の母親の役割 2
本庄 巖

執筆者紹介 8

特集：こころと身はひとつー心身医学、臨床心理学と東洋医学ー
特集“こころと身はひとつー心身医学、臨床心理学と東洋医学”にあたって
..... 11

小川 侃

東洋医学における心身 13
今西二郎

自然に帰する 20
吉田 喜久子

東洋医学における心身連続の意味の多様さ 30
梶谷真司

「身」の心身医学ーからだの声、こころの声を聴くー 40
中井吉英

心身医学と臨床心理学ー対比から協働に向けてー 49
高橋 昇

生命の一元論 59
小関彩子

いのちの科学プロジェクトシリーズ

テーマ：共に生きる

㊦ 寿命の意味 68
高木由臣

連載講座

不老長寿を考える (X) 76
山室隆夫

漢字の散歩道 (V) 数字は符号か、文字か 82
小南一郎

メタボの正体（Ⅰ）	87
	篠山重威

トピックス

危機にある地域医療に携わって	96
	小西淳二

コラム

「なるほど」と「ほどほど」の「あわい」	104
	山岸秀夫

サロン談義

サロン談義8 変貌する世界（Ⅲ）	
問題提起 3：世界の政治変貌から見えるもの	107
	中西 香
コメント 5：政体の比較と評定	116
	八木 紀一郎
コメント 6：生き甲斐のある社会を目指して	121
	上田公介

Books

日高敏隆 著	122
『僕の生物学講義－人間を知る手がかりの詳細』	
佐藤真一他 2 名 編著	123
『老いところのケア－老年行動科学入門－』	
最所久美子 著	124
『医療と福祉を超えて暮らしを拓く：住民力で地域医療－医師・宮原伸 二の奇跡－』	
村上陽一郎 著	125
『人間にとって科学とは何か』	
「五重塔のはなし」編集委員会 編著	126
『五重塔のはなし』	

Random Scope

バイオエネルギー生産の植物資源とその地域での鳥類多様性への影響	48
サンショウウオ胚に共生する藻類	58
親の肥満は子にたたるか？	75
見えないのに感じる青い光－新しい第 3 の光受容体の発見	106

読者のコーナー	128
編集後記	132
23 巻総合目次	133
投稿規定（改訂：2011/1/1）	137
本誌購読案内	138

執筆者紹介

Editorial：本庄 巖（ほんじょう いわお）

1935年生まれ。京都大学医学部卒業。京都大学医学部外科系大学院修了後、耳鼻咽喉科助手、関西医科大学耳鼻咽喉科講師、ドイツ・ヴュルツブルグ大学客員講師、関西医科大学耳鼻咽喉科助教授、高知医科大学耳鼻咽喉科教授、京都大学医学部耳鼻咽喉科教授を歴任。1999年京都大学名誉教授。主な著書に、小児人工内耳（金原出版、2002）、聴覚障害（金原出版、2001）、言葉を聞く脳・しゃべる脳（中山書店、2000）、人工内耳（中山書店、1999）、脳からみた言語（中山書店、1997）など。

特集：小川 侃（おがわ ただし）

1945年生まれ。京都大学文学部哲学科卒、京都大学大学院文学研究科博士課程終了、京都大学博士（文学）。1991年より京都大学大学院人間・環境学研究科教授。2002年京都大学大学院地球環境学堂および人間・環境学研究科兼任教授。2008年度より人間環境大学学長、京都大学名誉教授。2010年より人間環境大学特任教授。主要著書「現象のロゴス」勁草書房（1986）、「風の現象学と霧田気」晃洋書房（2000）、「霧田気と集合心性」京都大学学術出版会（2001）、Grund und Grenze des Bewusstseins, Koenigshausen und Neumann（2001）、Machiavelli et La Fenomenologia, Napoli（2003）、「環境と身の現象学」晃洋書房（2004）、「京都学派の遺産－生と死と環境」晃洋書房（2008）、Essen und Wissen, Muenchen: Iudicium Verlag（2008）

今西 二郎（いまにし じろう）

1947年生まれ。京都府立医科大学卒業。同大学院博士課程修了。パリ第7大学留学。現在明治国際医療大学教授、京都府立医科大名誉教授（免疫・微生物学）。専門は、微生物学、補完・代替医療、統合医療。主な著書に、「微生物学 250 ポイント」金芳堂、「免疫学の入門」金芳堂、「世界の伝統医学」（編著）医歯薬出版、「代替医療のいま」（編著）医歯薬出版、「看護職のための代替療法ガイドブック」（編著）医学書院、「未病の医学」（編著）医歯薬出版、「免疫疾患第2版」（編著）医歯薬出版、「現代西洋医学からみた東洋医学」（編著）医歯薬出版、「医療従事者のための補完・代替医療」（金芳堂）、「病気はなぜ起こる」プリメド社、「メディカル・アロマセラピー」金芳堂など。

吉田 喜久子（よしだ きくこ）

京都大学文学部哲学科卒、同大学院（宗教学専攻）終了、ミュンヘン大学哲学科留学。京都大学博士。

専門分野－宗教哲学、比較日本文化論。著書に「宗教の根元性と現代」（共著、晃洋書房、1999）ほか。

梶谷 真司（かじたに しんじ）

1966年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科修了。帝京大学を経て、2010年より東京大学大学院総合文化研究科准教授。専門は哲学（現象学）、比較文化、医史学。著作として「シュミツ現象学の根本問題－身体と感情からの思索」（京都大学学術出版会、2002）、「集合心性と異他性－民俗世界の現象学」（小川侃編「雰囲気と集合心性」京都大学学術出版会、2001）などがある。

中井 吉英（なかい よしひで）

1942年生まれ。関西医科大学卒業。九州大学医学部心療内科講師、関西医科大学第一内科学講座教授、同心療内科講座教授を経て、現在、関西医科大学名誉教授。洛西ニュータウン病院名誉院長・心療内科部長、関西大学客員教授、日本心療内科学会理事長。主な著書に「現代心療内科学」（編著、永井書店、2003）、「心療内科初診の心得」（三輪書店、2005）、「心療内科からの47の物語」（オフィスエム、2001）、「いのちの医療」（東方出版、2007）、「医療における心理行動科学的アプローチ」（監修著、新曜社、2009）などあり。

高橋 昇（たかはし のぼる）

1956年生まれ。名古屋大学教育学部卒業。臨床心理士。南豊田病院、資生会八事病院、心のクリニック・飯塚勤務を経て、2006年より九州女子大学人間科学部人間発達学科教授を勤める。2009年からは人間環境大学人間環境学部・人間環境学研究院教授。専門は臨床心理学、心理査定学、芸術療法。著書に「心理臨床家」（共著、誠信書房）、「臨床投映法入門」（共著、ナカニシヤ出版）、「こころを癒す音楽」（共著、講談社）、「実践ロールシャッハ法」（共著、ナカニシヤ出版）ほか。

小関 彩子（おげき あやこ）

1994年お茶の水女子大学文教育学部卒業。2001年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。2003年より和歌山大学准教授。著書：「雰囲気と集合心性」（共著、京都大学出版会、2001）。ベルクソンの哲学を核に、自我や身体の問題を研究している。

いのちの科学プロジェクトシリーズ：高木 由臣（たかぎ よしおみ）

1941年生まれ。静岡大学文理学部卒業、京都大学大学院理学研究科博士課程中途退学。京都府立医科大学助手・講師、奈良女子大学助教授・教授・理学部長を歴任。現在、奈良女子大学名誉教授。専門は原生動物学、遺伝学。著書に、「寿命論」（NHK出版、2009）、「生物の寿命と細胞の寿命」（平凡社、1993）。共著に、「生き延びること－生命の教養学Ⅴ」（慶応義塾大学出版会、2009）、「生き物なんでも相談」（大阪公立大学出版会、2009）、「ゾウリムシの遺伝学」（東北大学出版会、1999）、「新老年学 第2版」（東京大学出版会、1999）、「生命システム－複雑系の科学と現代思想」（青土社、1998）、「日本動物大百科 7. 無脊椎動物」（平凡社、1997）ほか。

連載講座：山室 隆夫（やまむろ たかお）

1931年生まれ、京大医学部卒業。近畿大医学部教授、京大医学部教授、京大医用高分子研究センター所長、京大医学部付属病院院長、国際整形災害外科学会財団理事長を歴任。専門は小児整形外科、関節外科、生体材料研究。現在、京大名誉教授、生産開発科学研究所理事長。著書：New Development for Limb Salvage in Musculoskeletal Tumors (Springer Verlag)、Handbook of Bioactive Ceramics (CRC Press)、臨床整形外科手術全書（金原出版）、整形外科医用材料マニュアル（金原出版）、ついでである記（医学書院）など。

小南 一郎（こみなみ いちろう）

1942年京都に生まれる。京都大学文学部卒業。京都大学文学部助教授、同大学人文科学研究所教

授を歴任、2005年に定年退職。京都大学名誉教授。現在は、龍谷大学教授、泉屋博物館長。専門は、中国古代・伝承文化研究。著書に、「中国の神話と物語り」(単著、岩波書店)、「西王母と七夕伝承」(単著、平凡社)、「楚辞とその注釈者たち」(博士論文、朋友書店)、「天命と青銅器」(単著、京都大学学術出版会)などがある。

篠山 重威 (ささやま しげたけ)

1937年生まれ。京都大学医学部卒業。日本循環器学会理事長、日本心不全学会理事長、浜松労災病院院長などを歴任。専門は、循環器内科学。現在、京都大学名誉教授、同志社大学 生命医科学部教授、医療法人 大寿会病院理事。著書に「心機能 収縮のメカニズムと評価法」(中外医学社)、「狭心症」(編集 医薬ジャーナル社)、「心不全」(編集 医薬ジャーナル社)ほか。

トピックス:小西 淳二 (こにし じゅんじ)

1940年生まれ。京都大学医学部卒業。京都大学大学院医学研究科博士課程修了、医学博士。米国ニューヨーク州ロチェスター総合病院内科、スタンフォード大学核医学科研究員を経て、1974年京大病院放射線部助手。京都大学医学部核医学講座講師、助教授、教授を勤め、2003年退官、京都大学名誉教授、杉田玄白記念公立小浜病院院長。2011年同名誉院長。専門は核医学、内分泌学。日本核医学会理事長、日本心臓核医学会理事長、アジア・オセアニア甲状腺学会会長(2005-10)などを歴任。著書に「臨床医のための核医学検査」(金芳堂)、「核医学ハンドブック」(編著、金芳堂)、「標準放射線医学」(編著、医学書院)ほか。

コラム:山岸 秀夫 (やまぎし ひでお)

1934年生まれ。京都大学理学部卒業、京都大学理学研究科博士課程(植物学)終了、理学博士。大阪府立放射線中央研究所技師、カナダ政府 NRC フェロー、米国カーネギー財団フェローを経て、1969年より京都大学理学部生物物理学教室助手、講師、助教授、教授を勤め、1998年停年退官後、財団法人体質研究会主任研究員、NPO さきがけ技術振興会監査。京都大学名誉教授。専門は免疫・分子遺伝学。著書に「遺伝子を観る」(裳華房、1998)、「免疫系の遺伝子戦略」(共立出版、2000)、「生命と遺伝子」(裳華房、2003)、訳書に「オオノススム、遺伝子重複による進化」(岩波書店、1977)など。

サロン談義:中西 香 (なかにし かおる)

1948年生まれ。京都大学法学部卒業。(株)東芝および東芝グループにて長年海外事業・経営企画に携わった。2003年および2005年富山大学経済学部非常勤講師。講義テーマは半導体企業の国内海外展開、中国およびアジアにおける電子産業の事業展開など。2008年退職後は世界経済を研究。

八木 紀一郎 (やぎ きいちろう)

1947年生まれ。名古屋大学大学院経済学研究科満期退学。経済学博士(京都大学)。岡山大学経済学部助教授をへて京都大学経済学部教授。2010年京都大学定年退職後、摂南大学教授。専門は社会経済学および経済学史。経済理論学会代表幹事。著書「ウィーンの経済思想」(ミネルヴァ書房)、「社会経済学」(名古屋大学出版会)ほか。

上田 公介 (うえだ こうすけ)

1945年生まれ。名古屋市立大学医学部臨床教授、名古屋市立東市民病院泌尿器科部長を経て、現在名古屋前立腺センター/温熱・免疫療法研究所所長。専門は泌尿器科学。主な著書に「ザ・前立腺-前立腺疾患となかよくつきあう方法、改訂第2版」(金原出版、1996)、「負けてたまるか膀胱癌」(KTC中央出版、1997)、「ハイパーサーミアの臨床」(分担執筆、医療科学社、1999)ほか。

特集 “こころと身はひとつー心身医学、臨床心理学と東洋医学” にあたって

小川 侃*



心身医学も健康科学も臨床心理学もすべて人間の精神と身体の在り方、こころと身体の関係を取り扱っています。そこで今回人間環境大学で「こころと身はひとつ」というテーマで医学者、心理学者、哲学者の間の学際的な会議を開催し、100人以上の方々で聴講し、そのあと活発な議論が展開されました。その議論を踏まえて発表の原稿をさらに手直ししていただきました。さらに当日の議論に参加できなかった読者の方々にも理解可能なようにして、ここにご披露します。

こころと身体についてはさまざまな観点から考察が可能です。私にはよく分かっているけれども他人の目には見えない私の心というものがあります。他方で私にはその一部しか見えないけれども他人にはいろいろな形で現れる私の身体という物体があります。この二つが一つであるというのがこの特集のテーマです。その場合の一つであるという関係にはいったいどのような理解が可能でしょうか。一般に二つのものの関係にはどのように考え

*人間環境大学前学長、同特任教授、京都大学名誉教授（現象学、政治哲学）

ても次の3種類しかありません。(1) 全く同じ一つのものか、(2) 平行しているのか、(3) 交わるのかです。

私にはいまのところ、哲学の歴史を踏まえて心身関係の三説が考えられます。たとえば心身は同一であるという第一の説。これは唯物論のもので、心は身体(例えば脳)と同一であるという考えです。物質からできている脳の一部を取り出すとそれは心そのものに他ならないという考えです。この考えに立ちますと、意識のもつ限界や無意識、与えられたものを超えて進んでいく意識の創造性を説明できません。この考えに立つと、すべては現在の脳の働きの中に与えられていることとなります。意識が行う文学や絵画の創造も、そのイメージも脳の中にあらかじめ与えられたものの位置の交換という意味にすぎなくなります。

それに対して、第二の説では心身は平行しており、心と身は、同じ一つの事実を説明する異なる二つの側面だという考えです。この考えは、平行説と言われます。しかしこの説にも問題があります。いったい誰が心と身が平行している現象であると保証するのかということ。つまり情報として脳に伝えられたイメージを魂が脳の中で直接読み取るのではなく、脳への触発を機会として神が自分自身の中から心にこのイメージを吹き込むというわけです。心でも身体でもない第三者の目として神を呼び出すこととなります。

第三の説は、心と身の対立の説です。この説はもっともらしくみえるのです。しかし問題があります。事実として心が命令して身体を動かす時に(たとえば足の裏が痒いので私が痒いところを搔くという場合には)どこかで心と身体は、接触しているはずなのですが、この接触点をうまく説明できません。デカルトの最良の弟子であったエリザベト王女のデカルトへの論駁をデカルトは、最も高く評価しました。エリザベト姫はつぎのようにデカルトに書いています。「人間の精神は、いかにして身体の精気(エスプリ)が意思的な運動をするよう決定しうるのか、どうかお教えてください」(『デカルト=エリザベト往復書簡』山田弘明訳、講談社学術文庫)。この問いに対してなされたデカルトの解決の試み、つまり心と身体が出会う場としての(脳の中の)松果腺を設定するという提案は現在の科学によって否定されています。

これらの三つの説に対して私は心と身体の間には、同一でもなく、平行でもなく、交差するでもない関係があると考えています。それは、カオス関係、もしくは、ホリスティックな未決定性の関係です。カオス的關係とは、心と身体がどのように関わっているのかは一義的に決定できないという説です。カオス的關係は、未決定の關係なのです。一義的に決定しようとするから先ほどの三つの理論が成立したのです。それに対して私が言いたいのは実に常識的な考えです。心と身体はなんらかの關係にあるけれどもそれがどういふ關係かは一義的に決定できないという考えです。「20世紀最大の哲学者である」と西田幾多郎に評価されたベルクソンが比較的この考えに近いのです。それは、衣服とハンガーの關係にたとえられています。ハンガー(脳)とその上に掛けられた衣服(心)の間にはなんらかの關係があります。ハンガーが落ちると衣服も落ちます。ハンガーが揺れると衣服も揺れます。しかし、ハンガーと衣服は同じではありません。衣服はハンガーをはみ出しています。心は身体=脳を大きくはみ出しています。両者の間には一対一の關係はありません。この心身のカオス的な關係の説は、最近では、新現象学運動のヘルマン・シュミッツの考えに似ております。

(イラスト：中井英之)